

<企業DATA>

資本金	4,000万円
所在地	出雲市西代町
業種	鉄鋼業
従業員数	85名



お客様に満足していただける

鋳物づくりを目指して——

鋳物素材から加工、塗装までを一貫して生産し、多品種少量生産を得意としています。

小ロットによる受注も多く、平均すると1ヶ月で約1000種以上の製品を製造しており、多種多様な製品の製造実績から蓄積されたノウハウにより、製品の特徴に合う適切な製造を行うことで、高い精度をもつ、高品質な製品を供給しています。

当社の 問題認識



利益が出にくい業界ではあるが、収益性を高めたい

支援テーマ



■デジタル導入による生産状況の見える化と生産性向上

■社内情報の集約と共有

支援の概要



①経営診断

当社の現状を多角的に診断するため、経営幹部へのヒアリング、工場の現場調査、製造・受注情報の分析を通じ、経営診断を実施

- ◆ 外部環境：鋳造産業の業界動向調査
同業者の先進的な取組企業の情報収集
- ◆ 財務：財務資料を基に、収益構造の分析
- ◆ 製造：製造フロー上の情報の流れ分析、型の探索時間分析
- ◆ 営業：造形ライン別の人時売上高分析（取引先ごとの売上）

②伴走支援

- ◆ 月次の定例会議の開催
- ◆ 先進企業の視察（株）高和製作所（長野県長野市）
- ◆ 工場のデジタル化の理想像の提案

成果



客観的な分析により製造現場の課題や取引先別生産性について再認識できた。
また県外先進企業視察により、工場のデジタル化に向けた気づきが得られた。

① 経営診断

外部環境、内部環境（財務・製造・営業）の分析による経営診断を行い、取り組むべき課題を提案

◆ 外部環境

鑄造産業の業界動向を調査し、小規模の事業所は減少傾向にあり、廃業した企業が担っていた既存需要を取り込むチャンスが生まれていること、ITへの積極投資による生産性向上は、競合他社に対する強力な差別化要因となることを提示し、システムによる生産状況の見える化により生産性向上を計る同業他社の成功事例を紹介。

◆ 財務

過去5年間の決算書類に基づいた財務分析を実施し、堅調な経営により財務基盤は強固であるものの、鑄造産業の傾向と同様に、材料費をはじめとする変動費率が高い構造にあることを示し、高収益化のための方向性として、「積極的な受注獲得による売上高の増大」「変動費(材料費・補助材料費)削減によるコスト減」を提示。

◆ 製造

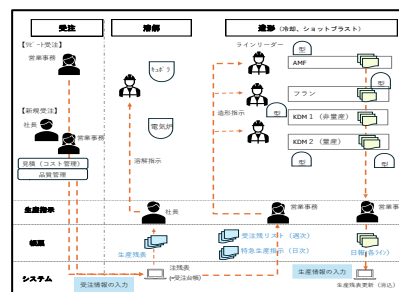
社長へのヒアリングより「生産状況がリアルタイムで把握できないこと」に課題があり、工場内の実地調査と製造現場責任者へのヒアリングを通じ、製品の動きと情報の伝達の連動を可視化・分析。

造形ライン（前工程）の進捗データは後工程の計画立案に不可欠であるが、現在はリアルタイムで後工程に共有されないため、後工程での準備遅延や手待ち時間が発生している可能性を提示した。

◆ 営業

造形ラインの生産記録（日報）と取引先別の受注データを統合し、「人時売上高」（従業員1人1時間あたりの売上高）を算出・分析。売上高は大きいものの、現場工数がかかり、時間あたりの収益性が低い結果となる取引先もあり、ヒラタ工業の指標とは異なる視点での取引先評価を行った。

加えて、営業ツールや手法に対する提案を行った。



	取引先	売上高	人数(M)	時間(H)	人時売上高(円/MH)
1	●●●	6,681,567	6	24.95	44,633
2	●●●	5,157,126	6	7.28	118,012
3	▲▲▲	4,316,153	6	12.07	59,615
4	▲▲空閑	3,811,184	6	11.25	56,462
5	●●●	3,639,518	6	13.78	44,009
6	▲▲▲	3,347,783	6	9.13	61,091
7	▲▲	3,227,023	6	9.33	57,625
8	●●●	2,164,615	6	10.75	33,560
9	●●●	2,117,150	6	7.25	48,670
10	▲▲	1,721,412	6	3.63	78,964

② 伴走支援

提案した内容の中から、以下の取組を支援 ②-1 月次定例会議の開催（経営情報の共有と行動方針の検討）

属人化しがちだった「取引先の最新案件情報」や「生産現場で発生しているリアルな課題」を経営幹部が一堂に介して共有する場を設定。

定着するまでの間は財団職員が会の進行を務めた。

②-2 先進企業視察

システム導入による「受注・生産状況の見える化」を具現化している株式会社高和製作所（長野県長野市）を訪問。

自社と同規模の事業体でありながら、現場の自動化・省力化に向けた積極的な設備投資を継続しており、デジタル化推進に向けたヒントを得た。

②-3 デジタル導入による生産現場の将来の理想像の提案

製造現場の課題改善の方向性として提示した「デジタル導入による課題解決」について、当社で導入した鑄型管理システムに加え、造形ラインの実績集計システムを組み合わせた形を提案。当面は、鑄型管理システムの本格運用を目指すこととした。



先進企業視察の様子



代表取締役 三好洋平 様

“現場に一步踏み込む診断”の意義

ライン別の生産分析を実施してもらったが、自社で持つ指標と違う結果が出た取引先もあったので、改めて考えるきっかけになった。財団は製造業の現場を見ているため、一步踏み込んだ分析をしてもらえるので、分析結果への信頼感があった。自社のペースで引き続き工場のデジタル化の取り組みを進めていきたい。



社長インタビューの全文は当財団のHPで公開中！